

“A Psychology which Accords so Extensive and so Handsome a Place to Sensibility” (3) : A Study of the Bergsonian Notion of <Sensibility> in his Later Years

Ryu MURAKAMI

In another paper I pointed out that Henri Bergson (1859-1941), a French philosopher, in his early years argues on <sensibility> from a similar viewpoint to his contemporaries'. In this paper I aim to examine his notion of <sensibility> in his later years, focusing on *The Two Sources of Morality and Religion* (1932).

Although rarely pointed out, in *Two Sources* Bergson argues on <sensibility> from his particular point of view. He proposes “a psychology which accords so extensive and so handsome a place to sensibility,” where emotion gains an advantage over intellect and volition.

When we compare *The Two Sources* with *Technical and Critical Vocabulary of the Philosophy*, a French encyclopedia published in 1926, we see that Bergson has his conception in common with his contemporaries to some extent, but that on the other hand he is outstanding among his contemporaries especially for his paying attention to the <superior component> of <sensibility>, which is characterized by activity and unity, in contrast to the <inferior component>, which is characterized by passivity and multiplicity.

「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」(3)

——晩期ベルクソン哲学における「感性」概念——

村 上 龍

以上、我々は、ベルクソンが哲学的キャリアの晩期に、「感性」にかんする独自の思想を育ててきたことをみてきた¹。だが、別の機会に論じたとおり、彼は哲学的キャリアの初期においては、「感性」について、むしろ同時代の思想的環境にてらして特異に映るところのない議論を展開していた²。それでは、変化が生じたのはなぜか。ベルクソンは一体どのような経緯から、「感性」をめぐる、「高次の」と形容されるべき成分をも視野に収めた固有の構想を形成するに至ったのだろうか。

この点を考えるうえで注目すべきは、ベルクソンが『二源泉』において、「感性」の「高次の」成分に論及するうえで、ときに「直観」の語を用いていることである。たとえば、「知性—以上の」情動について、これが「著者と主題との合致から」生じることが述べられているのはすでにみたとおりだが³、じつはそのさいベルクソンは、この「合致」を直後で「直観」(D.S. 43 : 1014) と換言している。また、やはり先にみたように⁴、神秘家を「神にたいしては受動者、人々にたいしては能動者」として位置づけるベルクソンの観点は、「感性」を受動的かつ能動的な能力とみなす観点に裏うちされていたが、彼はこれら神秘家を、「神秘的直観⁵」(D.S. 268 : 1190, 272 : 1193, 281 : 1200, 338 : 1245) の持ち主とみなしている。このように、晩年のベルクソンが提示する「感性」概念、わけてもその「高次の」成分は、哲学上のあるべき認識方法を意味する彼

¹ 本稿は、拙稿「「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」(2) ——晩期ベルクソン哲学における「感性」概念——」(『山口大学哲学研究』、27巻、2020年、91-111頁)の続編である。

² 拙稿「初期ベルクソン哲学における「感性」概念——一九世紀末の「心理学講義」を中心に——」(『山口大学哲学研究』、25巻、2018年、1-22頁)を参照されたい。

³ 本稿第3節1-3-2. を参照されたい。

⁴ 本稿第4節2-2. を参照されたい。

⁵ ベルクソンは『二源泉』において、哲学上の「直観」が、「高次の強化」(D.S. 265 : 1187)をへた「神秘的直観」によって「延長される」(D.S. 272 : 1193)と述べている。

独自の術語としての「直観」に、時として重ねあわされる。むろん、そうしたさいに、高度に術語化された哲学的認識方法それ自体が問題とされるわけではないし、そもそも、『二源泉』も含めた全著作中の使用頻度等に鑑みれば、「神秘的直観」は別としても、「美的直観」なる用語がベルクソン固有の術語として確立されているということさえできない⁶。だが、著作中ではまとまった仕方では議論の俎上にあげられることの少ない「感性」概念が、ベルクソンの独自性と言ってよいその「高次の」成分への着眼を介して、彼にとってもっとも重要な概念の一つと連動していることは、どうやら確からしい。

ところで、「直観」概念がさいしょに提出されたのは1903年のことであり、これは、ベルクソンの哲学的キャリアのうえでは初期と晩期の狭間にあたる。だとすれば、上で指摘した変化は、「直観」、および、これと密接にかかわる「持続」という自身の鍵概念にかんして、ベルクソンがこの狭間期にめぐらせた思索の産物にちがいない。そこで以下では、これら概念の周辺で生じた術語体系の編成ないし再編成を検討に付す。

第5節「直観」概念における視覚性と触覚性との交差

本節では、「直観」概念にかかわる記述を、我々の考察と関連するかぎりでは、複数の論考を横断しながら検討する⁷。

1. 「直観」概念の規定

1-1. 共感による二つとないものとの合致

「直観」がさいしょに提起された論文「形而上学序説」において、この概念は簡潔に規定されている。

我々がここで直観と呼ぶのは、二つとない (unique) ものと合致するため

⁶ のちにもみるように、ベルクソンは『創造的進化』のなかで、「美的直観」(E.C. 178 : 645) に言及している。本節3-1.、ならびに、註36もあわせて参照されたい。

⁷ 第5節の議論の一部には、拙稿「「感性 (sensibilité)」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯——なるものと多なるものとの関係を軸に——」(『美学』、63巻1号、2012年、25-36頁) においても、ごく概略的ながらふれてある。

に対象の内側へ身を移す共感⁸のことである (P.M. 181 : 1395)。

そのためには、知性の習慣的な働きを反転させて手をすすめなくてはならない (P.M. 198 : 1409)。

現実を絶対的に […] 所有し、そのうちに […] 身を置き、それについての直観を […] 得る手段があるとすれば、形而上学こそはまさにそれである (P.M. 181-182 : 1396)。

「直観」とは「二つとないものと合致するために対象の内側へ身を移す共感」であり、そのためには「知性の習慣的な働きを反転⁹させ」なければならないが、哲学者はこれをつうじて「現実を絶対的に」「所有」することができる。ベルクソンはそう言うのである。

このように、ベルクソンは「形而上学序説」において、のちに「感性」の「高次の」と形容されるべき成分に論及する文脈で登場する言葉をも用いながら、「直観」を規定している。『二源泉』のなかに、対象との合致によって二つとない情動を受けとる文学者について語る一節のあったことは、すでにみたとおりである¹⁰。むろん、そこで問題とされていたのは、哲学上の認識方法としての「直観」ではない。だが、言葉づかいの類似のみをもってしても、本稿の冒頭でみたように、作家と対象との合致をベルクソンが直後で「直観」と換言するの、

⁸ 論文の初出時には、「共感」の語は「知的な」という形容詞を伴っていた。論集への収録時にこの形容詞を削除した理由をうかがい知るうえで、ベルクソンとの長年にわたる交流をつづったジャック・シュヴァリエの著作『ベルクソンとの対話』が参考になる。シュヴァリエは、ベルクソンが1930年4月26日に、次のように語ったことを記録している。曰く、1903年の時点では、自分は「知性という語を、のちに、とりわけ『創造的進化』以降に、これに割りあてるようになった意味よりもずっとひろい意味で捉えて」おり、「知的なという用語」も「思考という語の形容詞」のつもりで用いていたのだが、その後、自分は思考を「直観」と「知性」とに「二分するようになった」のであると (Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Plon, 1959, pp. 121-122.) してみると、『思想と動くもの』への収録にさいしての変更の理由は、ベルクソンが「知性」を自身に固有の術語として確立したことにあるとみられる。

⁹ 「直観」と知性とのあいだの、あるいは、「直観」と知性の習慣的な働きとのあいだの対照性については、第6節であらためて取りあげる。

¹⁰ 本稿第3節1-3-2. を参照されたい。

ごく自然なことのようにみえる。

1-2. 生成の過程にそくした対象の把握

上述のように、知性の習慣的な働きを反転させよと訴えかけるベルクソンは、なにも魔術的な操作を推奨しているわけではない。

『思想と動くもの』「序論」には、本筋からはなれて読書術についてひとくさり論じる箇所がある。ベルクソンによれば、「あらためて創出する」ことなしに文学作品を理解することはできない。では、作品をあらためて創出するとはどういうことか。彼の考えでは、それは、「句読点」や「韻律」、「段落中の様々な句のあいだの、および、句を構成するさまざまな部分のあいだの、時間的な関係」を自らの声でなぞることによって、作品をつらぬくりズム、運動を辿りなおすことである (P.M. 94 : 1326-1327)。ようするに、音読をつうじて作品をその生成の過程に置きなおすことこそが、作品の理解のためには肝要だとベルクソンは主張するのである。

そしてベルクソンは、余談に余談を重ねるかのごとくに、この一節の締めくくりで以下のように述べる。

ついでに言えば、いましがた定義したような読書術と、我々が哲学にたいして推奨する直観とのあいだには、一定の類比がなりたつ。直観とは、世界という大きな書物のうちから選んだ頁のなかで、創作の運動とリズムを探りあて、共感によって自らをそこにさし入れつつ、創造的進化をあらためて体験しようとするものである (P.M. 95 : 1327)。

ここでは、哲学上のあるべき認識方法としての「直観」が、上述の読書術にひきよせて論じられている。音読によって「創作の運動とリズム」を我がものにするのと類比的に、哲学者は「共感」をつうじて対象の「創造的進化をあらためて体験」するのだとベルクソンは言う。してみると、対象との「共感」によって「直観」を規定するベルクソンが推奨しているのは、その生成の過程にそくして対象を把握すべきことなのである¹¹。

¹¹ これは、ベルクソン固有の術語を援用するならば、対象を「持続ノ相ノモトニ」(P.M. 142 : 1365) みることに他ならない。

2. 衝撃の受容と展開としての「直観」

このようにベルクソンは、「二つとないものと合致するために対象の内側へ身を移す共感」として「直観」を規定し、さらには、そこで言われる「共感」を、対象を生成の過程に置きなおすこととして説明する。だが、ベルクソン自身も「直観については単純な定義を求めないでほしい」(P.M. 29 : 1274) と述べるように、この概念は明瞭な規定には収まりきらない多義性をはらんでいる¹²。以下では、上の定義で明示的には言及されていない「直観」の成分を明るみにするべく、概念規定それ事体からはなれ、あるべき認識方法としての「直観」を採用した哲学者の振舞いについてベルクソンの論じるところを追う。

2-1. 受動性と能動性との混交

「直観」が哲学上の認識方法である以上、これを採用した哲学者の振舞いにかかわる記述のなかで、感官、わけても視覚にまつわる語彙が多用されることは自然であろう。じっさい、「形而上学序説」以降の様々な論考において、「直観」によって対象と相対する哲学者に言及するさいにベルクソンがさかんに動員するのは、「視覚 (vision)」(E.C. VIII : 492, IX : 493, P.M. 4 : 1255, 5 : 1256, 22 : 1270, 23 : 1270, 26 : 1272, 27 : 1273, 29 : 1274, 42 : 1285, 67 : 1305, 91 : 1324, 91 : 1325, 123 : 1350, 148 : 1370, 154 : 1374, 155 : 1375, 175 : 1391)、「見る (voir)」(E.C. 251 : 707, P.M. 4 : 1255, 69 : 1307, 123 : 1350, 142 : 1365, 149 : 1370)、「注視する (regarder)」(P.M. 154 : 1374, 167 : 1385)、「目で精査する (examiner avec des yeux)」(P.M. 199 : 663)、「鑑者 (spectatrice)」(P.M. 4 : 1255)、「目隠しをはずす (retirer ses œillères)」(P.M. 154 : 1374)、「ヴェールを遠ざける (écarter le voile)」(E.C. 272 : 725) 等々、視覚にまつわる語彙の豊富なヴァリエーションである¹³。

とはいえ、先にみた概念規定のなかで言われていたとおり¹⁴、哲学者は「直観」

¹² ベルクソンは、デンマークの哲学者ヘフディングが「直観」の4つの意味を見つけたことにふれたうえで、自分であれば「それ以上の」(P.M. 29 : 1274) 数を列挙できると述べている。

¹³ 『二源泉』において、「神秘的直観」をそなえた神秘家の振舞いについて語るうえでも、ベルクソンは幾度か「視覚」(D.S. 224 : 1155, 232 : 1162) の語を用いている。

¹⁴ 本節1-1. を参照されたい。

をつうじてあるものと合致するのである。そうだとすれば、ベルクソンがいみじくも言うように、そこで視覚が問題になるとしても、それは「見られる対象からほとんど区別されない視覚」(P.M. 27 : 1273) であるだろう。したがって、「直観」をつうじて対象を把握する哲学者の振舞いを、ベルクソンは他方で、「触れる (toucher)」(P.M. 21 : 1269, 33 : 1278, 137 : 1361, 218 : 1425, 226 : 1432)、「接触 (contact)」(E.C. 239 : 697, 369 : 807, P.M. 22 : 1270, 27 : 1273, 90 : 1324, 137 : 1361, 215 : 1423, 224 : 1430, 226 : 1432) といった触覚にまつわる語彙をつうじて語ってもいる¹⁵。このように、何ものかとの合致であるところの「直観」においては、視覚性と触覚性が交差するのである¹⁶。

それでは、たんなる視覚性にとどまらない、言うなれば触覚的な視覚性をベルクソンがもちだすとき、そこにはどのような賭け金が積まれているのか。視覚性と同時に触覚性にも訴えることによって、ベルクソンは何を強調したいのだろうか。論文「哲学的直観」のなかには、この点にかんしてきわめて示唆的な一節がある。提出された学説がどれほど複雑さをきわめようとも、哲学者は「かぎりなく単純な」「もとの直観」を「言いあて」ようとしているのにすぎないと言うベルクソンは (P.M. 119 : 1347)、それにひきつづいて次のように述べる。

その名に値する哲学者は、ただ一つのことしか言わなかった。いや、ほんとうに言ったというよりは、むしろ言おうと努めたのである。そして、彼が一つのことしか言わなかったのは、一点だけしか見なかったからである。いや、それは視覚というよりはむしろ接触であった。この接触が衝撃を与え、衝撃が運動を生んだのである (P.M. 122-123 : 1350) [。]

ここでは、視覚にまつわる語彙を触覚にまつわるそれに置きかえながら、あるいは、視覚性に触覚性を上塗りしながら、哲学者の振舞いが語られている。ベルクソンによれば、「直観」をつうじて対象と相対する哲学者は、これを見る

¹⁵ 『二源泉』において、「神秘的直観」をそなえた神秘家の振舞いに言及するさいにも、ベルクソンは幾度か「接触」(D.S. 52 : 1021, 227 : 1157, 232 : 1162, 233 : 1162) の語を用いている。

¹⁶ ベルクソンはまれに、「聴く (écouter)」(P.M. 167 : 1384)、「精神的な聴診 (auscultation spirituelle)」(P.M. 196 : 1408) など、聴覚にまつわる語彙に訴えることもあるが、この点についてはひとまず措く。

というよりはむしろこれと「接触」するのであり、だからこそ彼は、「衝撃」を受けとり自説を形成する「運動」へと差しむけられることになるのである¹⁷。してみると、ベルクソンがとくに触覚にまつわる語彙によって掬いとうろとするのは、何かを受けとりつつ一定の活動へむかう、その意味で受動性と能動性が交ぜになった局面なのである。

このように、ベルクソンは視覚性と触覚性を交差させながら、「直観」概念の規定のなかでは明示的にふれられていなかった論点に言及する。ところで、ここでのベルクソンの語り口は、「感性」の「高次の」成分にかかわるのちの議論を連想させるだろう。というのも、そこで問題とされていたのも、まさに受容することと働きかけることとの混交だったからである¹⁸。だとすれば、二つの議論のあいだには、言葉づかいのうえでの類似をこえた同型性が認められるのではないだろうか。

2-2. 統一から多性への分散

上でみた箇所においてすでに¹⁹、ベルクソンは、結果として提出される学説の複雑さに対比的に、学説の始点をなすものには、「一つのこと」、「一点」、「単純な」等々、もっぱら単純さや一性につらなる語を宛がっていた。じっさい、論文「哲学的直観」にそくするかぎり、「直観」を採用した哲学者の思索の過程、

¹⁷ ここで言われる「衝撃」に注目した研究としては、年代順に以下のものがある。Léon Husson, *L'intellectualisme de Bergson, genèse et développement de la notion bergsonienne d'intuition*, P.U.F., 1947. Rose-Marie Mossé-Bastide, "L'intuition bergsonienne," *Revue philosophique*, Avril-Juin, 1948, pp. 195-206. Henri Gouhier, "Bergson et l'histoire des idées," *Revue internationale de philosophie*, 10, 1949, pp. 434-444. このうちモッセ＝バスティッドは、「直観」における「生産的な原因性」を通りすぎりに指摘するのみだが (Mossé-Bastide, *op.cit.*, p. 200.)、ユッソンならびにグイエは、「直観」概念をめぐる議論と『二源泉』における「知性—以上の」情動をめぐるそれとのあいだの関連性に着目しており (Husson, *op.cit.*, pp. 192-193. Gouhier, *op.cit.*, p. 438.)、その点で本稿と視点を共有する。また、以下の三つの拙稿もあわせて参照されたい。「創造性の伝播——ベルクソンにおける藝術的コミュニケーションの問題——」(『若手美学研究者フォーラム論文選』、2004年、18-27頁)、「創造性の伝播」(前掲論文)、「Transmission of Creativity: An Essay on the Aesthetics of Henri Bergson」(*Aesthetics*, 13, 2009, pp. 45-57.)

¹⁸ 本稿第3節1.、わけても1-3-2. を参照されたい。

¹⁹ 本節2-1. を参照されたい。

すなわち、「衝撃」に端を発する「運動」は、一と多の対概念によって語られるべきものである。

哲学者は統一へ至ったのではなく、そこから出発したのだ。もちろん、私の言う統一とは、一個の生きものを諸事物の総体から切りはなすそのように、制限されていると同時に相対的なものではあるが。ともあれ、その作業は「…」総合ならぬ分析である (P.M. 138 : 1362)。

ここでは、哲学者の辿る思索の歩みが、「統一」を多なるものへ「分析」することとして論じられており、しかもそのさい、その歩みの始点にあたる「統一」を、ベルクソンは「生きもの」の有するそれになぞらえている²⁰。すでにみたとおり²¹、晩年のベルクソンもまた、「感性」の「高次の」と形容されるべき成分にかかわる議論のなかで、生命体の有する統一にも比せられよう一性から多性への移行を語っていた。それと同様に、ベルクソンはここでも、受動性と能動性とのない交ぜになった局面に、統一から多性への分散の構図を適用するのである。

2-3. 二つとない独自性の反響

ところで、哲学者が二つとない独自なものと同致するにもせよ、そこから受けとった衝撃を多性へと展開し自らの学説を形成するうえでは、彼は既成の観念に頼らざるをえないだろうことをベルクソンも認める。じっさい、いかなる学説のうちにもほぼ例外なく、「諸々の同時代人および先達の観念」(P.M. 121 : 1349) が見いだされるし、だからこそ、世人はしばしば複数の哲学者のあいだの影響関係をみてとるのである。だが、この点にかんしてベルクソンは、あわせて次のように述べることも忘れていない。

哲学者は諸々の既存の観念から出発するのではなく、せいぜいそこに到達すると言うことができるばかりである。そして、彼がそこに到達したならば、観念は彼の精神の運動に巻きこまれ、新しい生命を吹きこまれて

²⁰ なお、引用文中の生命体に言及する一文は、論集『思想と動くもの』への収録にさいして書き加えられたものである。

²¹ 本稿第3節2-1.、ならびに、2-2. を参照されたい。

[...] もはや旋風の外にあったときのままではいられなくなる (P.M. 134 : 1358)。

哲学者がいやしくも「直観」をつうじ対象と相対したのであれば、学説のそこかしこに紛れこむ「諸々の既存の観念」もかならずや「新しい生命を吹きこまれ」、もはや以前のままではいられなくなる。言うなれば、始点における二つとない独自性が終点にまで反響するというわけである。

我々はここでもまた、「感性」の「高次の」成分にかかわるのちの議論とのあいだの共通性を指摘することができる。『二源泉』においてベルクソンが、統一から多性への分散を語るなかで、ピラミッドの頂点をいろいろ二つとない独自性が底面をなす多性にまで反響することを述べていたのは、先にみたとおりである²²。

2-4. 多性の複数可能性

なお、始点における二つとない (unique) 独自性がそのように終点にまで反響するものだと、だがそれは、ありうべき多性がただ一つである (unique) ことを意味するわけではない。というのも、先ほどみたばかりの引用文の直前では、次のように述べてられているからである。

あらゆる思考の作用を特徴的づける、かの運動に導かれて、この思考は、自らをますます細分することによって精神の相次ぐ諸平面へしだいに広がりゆき、ついには発話の平面にまで達する。そこでは、思考が一つの文句によって、すなわち、予め存する諸要素の群れによって、表現されるわけだが、そのさい思考は、群のなかの先頭の要素を、その他の要素がこれと相補性をなすかぎりにおいて、ほとんど任意に選ぶことができる。また、同一の思考が、まったく異なる語からなる様々な文句に翻訳されることもありうるのであって、その場合には、それら諸々の語がおなじ関係をとっていさえすればよい。[...] 一つの哲学が構築されるとき作業も同様である (P.M. 133-134 : 1358)。

ここでは、哲学上の学説を形成する思索の歩みが、発話に至る過程と同列に扱

²² 本稿第3節2-3. を参照されたい。

われている。ベルクソンによれば、一定の思考を発話へと導くにあたって、我々は「精神の相次ぐ諸平面」を経由しつつ細分化によって事運ぶが、その最終段階において、すなわち、複数の語からなる文句をいよいよ発話する段階において、我々は一定の条件のもとでそれら語を「任意に」配列できるし、さらには、やはり一定の条件下であれば、同一の思考を「まったく異なる語からなる」別の文句によって「翻訳」することさえできる。そして、一性から多性へ移行する哲学者についても同様のことがあてはまるとベルクソンは言うのである。

このようにベルクソンは、「感性」の「高次の」と形容されるべき成分にかかわるのちの議論におけるのとおなじく、一なるものの分散によって形成される多性がそれ自体もまた多的でありうることを、ここでも主張する。彼が『二源泉』において、一性から多性への移行を論じるうえで、やはり「翻訳」の語を用いながら、ピラミッド²³の頂点に複数の底面を宛がいうることにふれているのは、先にみたとおりである²⁴。

2-5. 知性との関係

この文脈で指摘すべきことは、上の諸点につきるものではない。さいごに、ふたたび『思想と動くもの』「序論」へたち帰ろう。

なるほど、直観といえども知性を介してしか伝わらないだろう。それは観念以上のものではあるが、それでも、伝えられるためには諸々の観念のうえに馬乗りにならねばならないだろう (P.M. 42 : 1285)。

潜水夫が水底に潜り、上空から飛行士の教えた漂流物を触りにゆくように、概念的な環境に身を浸した知性は、総合的な知性—以上の視覚の対象となったものを、一つずつ [...] 分析的に検証するのである (P.M. 67 : 1305)。

ここでは、「直観」と知性の連携が語られている。「直観」によって得られた認

²³ なお、本文中の引用文のなかでは、我々が発話に至るまでに精神の複数の平面を経由してゆく旨が述べられているが、この点もまた、先のピラミッドの比喩をつよく連想させる。本稿第3節2-2-1. でみた引用文を参照されたい。

²⁴ 本稿第3節2-4. を参照されたい。

識は、それ自体は「知性—以上の」ものではあるが、この「総合的な」認識を他の人々に伝えるためには、知性の働きをつうじて「諸々の観念」へと「分析」する必要がある²⁵。飛行士や潜水夫の比喻にも訴えながら、ベルクソンはそのように言うのである²⁶。

道具だての類似性から言って、ここでの議論は、論文「哲学的直観」で論じられていた、統一から多性への分散にそのまま当てはまるとみてよいだろう。だとすれば、「感性」の「高次の」成分にかかわるのちの議論におけるのと同様に²⁷、ここでもまた、「知性—以上の」一性を多性へと下降させる役割が、知性に割りあてられているのである。

ここまでみてきたように、ベルクソンは、「直観」をつうじて対象と相対する哲学者の振舞いを論じるなかで、視覚性と触覚性を交差させながら、定義のうちでは明示的に語られてはいない「直観」の成分に論及している。あるいは、別の言い方をするならば、概念規定のなかで述べられていた、二つとないものとの合致の意味するところが、視覚性に触覚性を上塗りしつつ掘りさげられている。そして、そのさいにベルクソンが強調するのは、受動性と能動性との混交、統一から多性への分散、分散にさいしての二つとない独自性の反響ならびに多性の複数可能性、知性との連携などの論点である。したがって、「直観」をめぐるベルクソンの議論と、「感性」の「高次の」成分にかんするのちのそれとのあいだには、たんなる言葉づかいのうえでの類似をこえた、紛れなき同型性を認めることができる。

3. 芸術もしくは文学への参照

「直観」をめぐるベルクソンの議論と、「感性」の「高次の」と形容されるべき成分にかんするそれとのあいだには、上述のように正確な同型性が認められ

²⁵ 知性の働きが総合的なものの分析にあるとされている点については、本稿第6節であらためて補足する。

²⁶ なお、ベルクソンはここで、知性の働きに言及するさい、「触る (palper)」という、触覚にまつわる語彙に訴えている。この用語の選択は、知性と対比される「直観」を「視覚」と呼ぶことに伴ってのことかと思われるが、ベルクソン哲学においてはきわめて例外的な用語法である。

²⁷ 『二源泉』でも、「知性—以上の」情緒的状态を諸表象へ展開する役割が知性に割りあてられていた。本稿第3節1—3—1. を参照されたい。

るわけだが、そのことに加えて、我々はさらに、「感性」の「高次の」成分をも視野に収めたベルクソンの構想が、まさに「直観」概念をめぐる思索の進展におうじて育まれたということを主張したい。この点を明らかにするべく、以下では、ベルクソンが「直観」を論じるにあたって、芸術的ないし文学的な創作を参照している箇所を検討する。

3-1. 共感としての美的能力

じつはベルクソンは、「直観」を共感として概念規定するのにあたって、そもそも芸術をひきあいになしながらそうしている。たとえば、『創造的進化』のなかには、次のような一節がみとめられる。

この種の努力〔直観〕が不可能でないことは、通常の知覚の他に美的な能力が人間に備わっていることから、すでに証明されている。我々の目は生きものの諸特徴をみてとるが、そのさい、これら特徴は並置されたままで相互に組織されていない。生命の意図、すなわち、諸々の線を横断して走り、それらを結びあわせて一つの意味を与える単純な運動は、我々の目から逃れるのだ。芸術家はこの意図をこそ掴みなおそうとして、一種の共感によって対象の内側に身を置き、自らとモデルとのあいだに空間が設ける障害を直観の努力によって低める (E.C. 178: 645)。

ある「生きもの²⁸⁾」を対象として選んだ場合、芸術家の目はその諸特徴を「相互に組織」し、「一つ」に「結びあわせ」るが、ベルクソンに言わせれば、通常の知覚とは異なるこの総合的な視覚²⁹⁾は、「一種の共感によって対象の内側に身を置く」ことで得られるものである。そこで彼は、哲学上のあるべき認識方法としての「直観」の可能性を、おなじく「共感」によって特徴づけられるこの「美的な能力」によって担保するのである³⁰⁾。

²⁸⁾ ここでも、生命体における一性が取りざたされるわけである。本稿第3節2-2-2.、および、本節2-2. を、さらには、既出の拙稿「初期ベルクソン哲学における「感性」概念」をも、併せて参照されたい。

²⁹⁾ ベルクソンは『思想と動くもの』『序論』のなかで、それが一性に与するという点に鑑みて、「直観」を「総合的な視覚」と呼んでいた。本節2-5. を参照されたい。

³⁰⁾ なお、ベルクソンは、ここで言われる「美的直観」と哲学上の「直観」との違いを、前者が「外的な知覚と同様、個的なもの〔個々の生きもの〕にしか達しえない」のた

3-2. 衝撃の受容と展開としての創作

上述のように、芸術家に特有の美的能力が哲学上の「直観」と同様に共感によって特徴づけられるものであるとしたら、そこで問題となる総合的な視覚は、同時に触覚性をも併せもつはずである³¹。じっさい、ベルクソンは「形而上学序説」の末尾に、のちの『二源泉』の一節を連想させずにはおかない文言から始まる³²、次のような文章を挿入している。

文筆の仕事に携わり、しかも成功した者なら誰でも知っているように、主題を長らく研究し、あらゆる資料を集め、取るべきノートをすべて取っても、文筆の作業そのものに取りかかるにはまだ何かが必要である。それは、一挙に主題の核心そのものに身を置き、あとはこれに任せさえすればよいという衝撃をできるだけ深いところまで探しにゆく、しばしばつらい努力である。この衝撃をひとたび受けると精神は投げだされ、その軌道上で […] 衝撃が枚挙にいとまがないほど多くの言葉へおのずと展開され、分析される。 […] だが、背後に感じられる衝撃のほうへ突然ふり返りこれを捉えようとすれば、それは姿を消す。というのも、それは事物ではなく運動への鼓舞³³だったからであり、際限なく拡がりうるが単純そのものだったからだ。形而上学的直観もこれと同種のものと思われる (P.M. 225-226: 1431-1432)。

ここでは、文学的な創作が、哲学上の「直観」にひきよせて論じられている。

いして、後者は「生命一般を対象とする」という点に求めている。また、『笑い』や、『思想と動くもの』所収の論文「変化の知覚」、さらには、ヘフディングにあてた手紙においても、『創造的進化』におけるのとは異なった観点からではあるが、ベルクソンは芸術と哲学とのあいだの相違について語っている。Cf. R. 118: 461, E.C. 178: 645, P.M. 175: 1391, Mél. 1148.

³¹ 本節2. を参照されたい。

³² ベルクソンは『二源泉』において、「感性」の「高次の」成分を論じるうえでも、「文筆の仕事に携わった者なら誰でも」という文言から語りおこしていた。本稿第3節2-1. を参照されたい。

³³ なお、論文初出時には、「運動への鼓舞」ではなく「運動の方向」という言葉が用いられていた。

「直観」をつうじて対象と相対する哲学者と同様に、作家は「一挙に主題の核心そのものに身を置」くことで「衝撃」を「受けと」り、この「単純な」「衝撃」を言葉によって「際限なく」「分析」する「運動」へと投げだされるものだとベルクソンは言う³⁴。一なるものの受容、および、その多性への展開といった問題構成は、論文「哲学的直観」においてもみられたところである³⁵。してみると、ベルクソンはここで、「直観」をめぐる視覚性に触覚性を上塗りするさいと同様の道具だてによって、のちに「感性」の「高次の」と形容されるべき成分が発現する場面としてふたたび言及することになる事柄について、語っているわけである。

以上でみたように、哲学上のあるべき認識方法としての「直観」にかかわるベルクソンの議論は、芸術ないし文学への参照のうえになりたっており、しかもそのさい、彼がとくに注目するのは、のちに「感性」に、わけてもその「高次の」成分に、論及するうえで注目することになるのと同じ場面なのである。だとすれば、次のように考えるべきであろう。ようするに、その「高次の」成分をも視野に収めた「感性」概念の構想は、「直観」概念を確立する過程で、芸術的もしくは文学的な創作について省察を深めることをつうじて育まれたのである。そうであってみれば、「直観」にかかわる議論と「感性」の「高次の」成分にかかわるそれとのあいだに同型性が認められるのも当然であって、またそれゆえにこそ、ベルクソンは『二源泉』において、「感性」の「高次の」成分が発現する場面に論及するうえで、ときとして「直観」という用語を用いるわけであろう³⁶。

³⁴ なお、瀧一郎はこの一節から、ベルクソンの「直観」概念における観想と創造の一体性を読みとっている。「我々がここで確認せねばならないのは、ベルクソンの直観が、読む経験のみならず書く経験によっても説明され、受動的な享受だけでなく芸術的創出によっても説明されるという点である。このことが示しているのは、おそらく、形而上学的直観の単純な働きのうちでは、観想と創造とが一つのものでしかないということである」(Ichiro Taki, “Introduction à l'étude de l'esthétique bergsonienne : Première formation de la notion d'« intuition »,” *Bijutsuka-kenkyu*, 14, 1996, p. 32.)。この解釈は、本稿の立場とただちに相重なるわけではないが、これと両立不可能なものではない。

³⁵ 本節2-1.、ならびに、2-2. を参照されたい。

³⁶ 本稿の冒頭を参照されたい。また、本節3-1. でみたように、『創造的進化』においては「美的直観」への言及もみられる。ただし、先にも指摘したとおり、その使用頻度等に鑑みるならば、「美的直観」という用語がベルクソン固有の術語として確立されているとは言いがたい。

ベルクソンがこのように、一と多の対概念をつうじ、「感性」をめぐる晩年の思想に結びつくような仕方です。「直観」概念を確立するに至った経緯をさらに問うならば、そこにはいかなる背景がひかえているのだろうか。

先述のとおり、ベルクソンが哲学上のあるべき認識方法として「直観」概念をはじめて提出したのは1903年のことであったが、その年までに、彼はすでに三冊の著作を世に送りだしている。生涯をつうじて、ベルクソンが論集も含め八冊の著作をしか著さなかったことを踏まえるならば、じつは「直観」は、彼の哲学的キャリアの中期にいたってようやくキーワードとして浮上してきた概念でしかないという言いかたもできる。そして、「直観」の「基礎的な意味」を「持続において考える」ことに求める『思想と動くもの』「序論」の一節や(P.M. 30: 1275)、「直観の理論は持続の理論に由来するのであり、それによってしか理解されえない」(Mél. 1149)ことを強調する、デンマークの哲学者ヘフディングに宛てた手紙などからも明らかなおろ、哲学上のあるべき認識方法としての「直観」をつうじて所有される現実とは³⁷、ベルクソンにとっては「持続」を措いて他にないのであるから、その意味では、彼の「直観」概念は、処女作以来のキーワードである「持続」概念との密接な関係下にあり、また、その関係のゆえにはじめて鍵概念たりえたのである。

そこで次節では、本節での考察と関連するかぎりです、「持続」概念を考察の俎上にのせる。

³⁷ 本節1-1. でみた「直観」概念の規定を参照されたい。

凡例

ベルクソンの著作からの引用は*Œuvres*, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991 (1959^{1re}) に拠り、以下の略号とともに、単行本、著作集の順に頁数を () 内に記す。

R. : *Le Rire*, P.U.F., 2007 (1900^{1re}).

E.C. : *L'évolution créatrice*, 2007 (1907^{1re}).

D.S. : *Les deux sources de la morale et de la religion*, 2008 (1932^{1re}).

P.M. : *La pensée et le mouvant*, 2009 (1934^{1re}).

上記に未収録のものは*Mélanges*, textes publiés et annotés par André Robinet, P.U.F., 1972に拠り、同じく略号 (Mél.) と共に頁数を () 内に記す。